

若手作家が滑川市に滞在して創作活動に取り組む「滑川アーティスト・イン・レジデンス」が、国登録有形文化財の同市田中小学校旧本館で行われている。7月から始まった

公開制作は最終盤を迎え、国内外の3人が風景や文化など肌で感じたことを表現に込めている。18日からは成果展がある。

(藤木優里)

滑川の景色 アートで表現

国内外若手作家3人

18日から 滞在し空間芸術制作 成果展

不動産業のアトム(東京)が開く学生向けの公募展の一環で、滑川市内での入賞者の滞在や公開制作を昨年から実施している。ことしは武蔵野美術大3年の湯川爽海さん(24)＝東京＝と、東京芸術大大学院修了の水野渚さん(35)＝神奈川＝が参加。市内で恒例の「ラントランまつり」で縁のあるベトナムからも公募し、音楽家のハ・トウィ・ハンさん(36)が来県した。

それぞれインスタレーション(空間芸術)を手がける。湯川さんはペースト状にした新聞紙で作ったかごや、鉄粉と海水を吹き付けてさびさせた五箇山和紙を用いる。展示場所は市出身の詩人、高島高の生家である旧高嶋医院を選んだ。「私と高島さんが見た富山の景色を浮かび上がらせたい」と話す。

水野さんは県産米のもみ殻で作ったガラス玉などを展示し「緑や茶など土壌によって異なる色合いを染しんでほしい」。富山が米騒動発祥の地であることから「生活を守ろうと起こした行動が、歴史上の大きな動きにつながる面白さも伝えたい」と意気込む。

ハンさんは滑川の印象について、自然が身近にあり、拠点とする田中小旧本館は木造校舎で、幼い頃の記憶を思い起こさせてくれると指摘。「伝統と現代、静けさと騒々しさといったコントラストを作品に落とし込んでい」と話した。市内のベトナム出身者が制作に協力する。

公開制作は17日までで、成果展は18、26日。いずれも見学、入場は自由で、日々の様子はSNS(交流サイト)で発信している。

▲滑川市に滞在し、創作に励む(左から)湯川さん、ハンさん、水野さん



ハンさんの作品制作に協力する滑川市在住のベトナム出身者